

体験学習による学習効果

—高齢者疑似体験記録の内容分析を通して—

竹内美由紀*, 横川絹恵

香川県立医療短期大学看護学科

Research on the Effect of Experience Study

—Contents Analysis of Elderly Person Simulation Experience—

Miyuki Takeuchi* and Kinue Yokogawa

Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Science,

Abstract

The students performed elderly person simulation experience study for understanding of elderly persons. The record after experience study and the contents of reports were analyzed. The following study effects became clear.

- 1) Simulation experience study is effective for physical understanding.
- 2) The physical side understood through experience study influences understanding of elderly person's mental side.
- 3) The experience study led students to self-reflection, and improvement of the way of talking, attitude and contents of care.
- 4) The experience study enables students to understand the characteristics of elderly persons' action and the importance of support.

Key Words : 疑似体験 (simulation experience), 高齢者 (elderly person),
看護学生 (nursing student), 看護教育 (nursing education)

*連絡先 : 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護科

*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0123, Japan

はじめに

わが国は世界でも類を見ないほどの速度で高齢化が進んでいる。65歳以上の総人口に占める割合は1999年には16.7%となった¹⁾。このように高齢社会を迎え、看護職に対する社会の期待は増大している。

こうした背景の中、核家族化が進み現代の学生の多くは看護学生に限らず、高齢者との生活体験をもつ者は少ない。また、学生は、高齢者の特徴の理解が知識の範疇であり、学習で概念化されても、街中で高齢者を見かける印象からくる感覚的な捉え方や自己の尺度で高齢者を判断してしまいがちである。

老年看護学の学習過程では、まず健康で社会生活を営んでいる高齢者を正しく理解することが重要である。中川は体験学習について「人間を動かす、あるいは自分を変えるためには客観的知識だけでは不十分で、大事なものはイメージで、このイメージを変えるのが体験学習である」²⁾と述べている。前回老年看護学概論の授業前・後における高齢者イメージを調査した。授業後は全体的に肯定的方向にイメージが変化していたが、高齢者の身体的老化や活動性の低下などに否定的イメージが見られた³⁾。どのような高齢者イメージをもっているかは高齢者に対する

看護の質や内容に影響を及ぼす要因の一つと考えられる。

高齢者と接する機会の少ない学生にとって高齢者疑似体験（以下、体験学習と称す）は、高齢者の内面に気づき、老いへの理解をすすめることができる方法の1つである。先行研究では、体験学習をすることで老人や老化に対するイメージが好転し高齢者理解が深まったものは多数ある。しかし、高齢者理解の質の深まりについては少ない。

そこで今回、老年臨床看護論の授業の中で高齢者の直面する問題について理解を深めることと、高齢者への対応を考え、今後の学習への動機づけのため体験学習を行った。体験学習後の感想内容の分析をとおして、学習効果を検討したのでここに報告する。

方 法

1. 研究方法

1) 研究対象：平成12年度本短期大学看護学科2年次生45名。

2) 演習内容

演習期間：平成12年10月4日～10月11日。

演習内容：高齢者体験セット LM-060 (高研)

表1 高齢者疑似体験学習の条件設定

-
- 1) 場所：リハビリテーション室、学内全域
 - 2) 進め方：体験学習120分、グループ学習30分、ディスカッション30分を目安とする
 - ①1グループ2名から3名のグループに分かれる。
 - ・各体験者は、リハ室または学内探索の課題のどちらか一つを体験する。
 - ・体験者は、以下の高齢者体験セットを身につける。体験者は、示された課題を中心に実行する
白内障ゴーグル、耳栓、背中プロテクター、指拘束具、手袋、肘拘束具（手首重り）、膝拘束具（足首重り）
 - ・残りの学生は体験者に同行し課題の達成が困難な場合、助けを行い、また体験者が事故に遭遇しないよう危険防止に努める。
 - ②体験学習（120分）
 - ・体験時間は場所毎に、1人30分を目安とする（着脱、移動時間を含めて1人約40分）
但し、2人グループの場合は時間的に余裕があるため延長可。
 - *リハビリテーション室
 - a. テキストを1頁読む。
 - b. 身振りをいれず言語のみを用いて昨晚の夕食の献立について会話する。
 - c. ベッドに寝る。起きあがって椅子に座る。
 - d. 畳に寝転び、起きあがる。
 - e. 非利き手で、コップを持ち水を飲む。おはじきをつまんで口に入れる動作をする。箸を使い、ブルーとグリーンのおはじきを選んで皿から茶碗に移す。
 - f. 時間があれば、車椅子試乗、松葉杖使用などリハ室内で可能な体験をする。
 - *学内探索
 - a. 扉を開閉し、廊下・校舎内を歩行する。
 - b. 階段昇降をする。（校舎内、図書館、管理研究棟間の階段）
 - c. エレベーターの使用
 - d. 自動販売機、キャッシュディスプレイの使用をする。
 - e. 公衆電話を使用する。
 - f. 学内のトイレに座り、主に非利き手を使ってトイレトペーパーを取りお尻を拭く
 - g. 時間があれば、その他自由な行動は可。但し危険防止に留意してもらう。
 - ③リハ室、学内探索の体験課題終了後、場所の交替をする。
 - ④体験を全員終了したグループから、グループ毎に体験したことを記録用紙にまとめる。
 - ⑤まとめたものについて発表し、ディスカッションを行う。
-

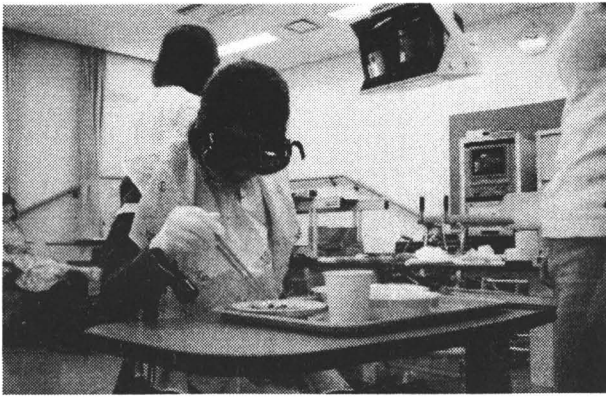


写真1 箸を使っの食事

を着用し、高齢者の状態を疑似体験することおよび学内探索を行い短大施設内の設備状況の確認と改善点を考えることを事前にオリエンテーションした。体験学習内容は、1グループ2名から3名のグループに分け、1人30分を目安に日常生活動作の体験または学内探索を実施した。実施後、グループ毎の体験記録と個人で体験学習の感想を自由記述でレポートし、演習終了後1週間目に提出させた。具体的体験学習内容は(表1)に示した。(写真1・2)

3) 老年看護学の既習学習内容

1年次に、老年看護の対象の理解と老年看護の機能と役割を理解する老年看護学概論1単位(15時間)、2年次になり、社会構造の変化や高齢化に伴う高齢者の保健・医療・福祉の場における課題を理解する老年保健論1単位(15時間)、看護活動の領域について知り高齢者の理解をより深める老年臨床看護論1単位(30時間)を終了している。2年次の10月上旬からの、老年期における健康障害の特徴を理解し、看護援助についてを学ぶ老年臨床看護論・演習1単位(45時間)の開始時の8時間を当てた。

2. 分析方法

個別記載の体験学習の感想レポートは、文章を文脈(一文一意味)で区切り分析単位とした。各文脈の内容をコード化し、内容の類似性にしたがって分類しサブカテゴリーを抽出した。さらに、カテゴリーを抽出し、対象理解とケアの明確化の視点より内容を反映させネーミングをつけた。

グループ学習の体験学習記録は、学内探索結果について、体験した行動場面毎に、感じたことと改善策の内容を分類した。

自由記載内容の分類については、KJ法に準じて教員間で協議し合意を得ながら分類した。

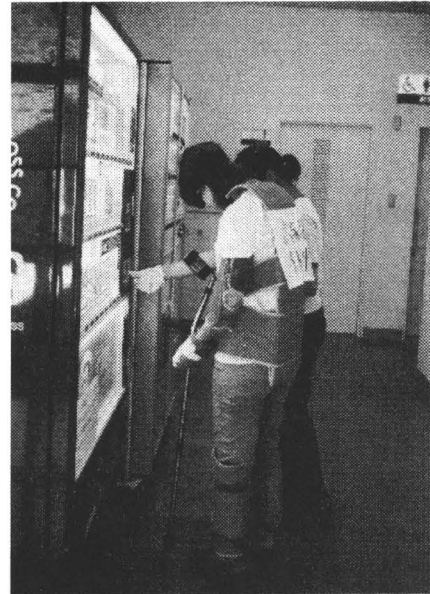


写真2 自動販売機の使用

結 果

1. 感想レポートより抽出されたカテゴリーについて

体験学習後の感想レポート内容から抽出された学習内容は、記述総コード359文脈数で学生1人あたり最高16文脈・最低3文脈で平均8.0文脈であった。37個のサブカテゴリーに分類でき、さらに「身体的理解」「心理的理解」「社会的理解」「高齢者に対する自己認識」「高齢者に対する自己認識の変化」「自己の課題の明確化」「ケアの方向性」「社会への要望」の8個のカテゴリーに分類された(表2)。

また、各カテゴリー別に記載のあった学生の割合は、学生45名中、「身体的理解(視覚・聴覚)」30名(66.7%)、「身体的理解(動作・機能)」28名(62.2%)、「身体的理解(手の巧緻性)」13名(28.9%)、「心理的理解」33名(73.3%)、「社会的理解」8名(17.8%)、「高齢者に対する自己認識」34名(75.6%)、「高齢者に対する自己認識の変化」6名(13.3%)、「自己の課題の明確化」5名(11.1%)、「ケアの方向性」21名(46.7%)、「社会への要望」30名(66.7%)であった(図1)。

2. 高齢者の身体的、心理的、社会的理解について

高齢者の対象理解として、身体的理解は124文脈数(34.5%)で、『身体動作』『視覚』『聴覚』『手の巧緻性』が抽出された。内容としては、「視野がとても狭い」、「色の見分けがはっきりできない」、「聞こえにくい」、「周りの人がわからない」、

表2 高齢者疑似体験学習による学生の学習内容

カテゴリー	文脈数	サブカテゴリー	文脈数	学習のレベル
身体的理解	124	視覚	50	対象理解
		聴覚	9	
		身体動作	45	
		手の巧緻性	20	
心理的理解	57	不安	19	対象理解
		いらだち	15	
		恐怖	12	
		ストレス	2	
		孤独	2	
		危険	2	
		戸惑い	2	
		不快	1	
		情けない	1	
		つらい	1	
社会的理解	9	高齢者事故の多発	3	対象理解
		閉じこもり	3	
		高齢者の住みにくさ	3	
高齢者に対する自己認識	69	理解できていなかった自分への気づき	28	対象理解
		相手の立場に立つ大切さ	34	
		やさしい気持ちの必要性	7	
高齢者に対する自己認識の変化	8	身体機能の理解	3	認識の変容
		高齢者イメージ	2	
		援助の必要性	1	
		じっくり待つことの大切さ	1	
		身体的共感	1	
ケアの方向性	37	介護用具	20	援助の具体化
		気づかい・心配り	14	
		閉じこもりへの援助	3	
自己の課題の明確化	5	生活改善への実践	1	課題の明確化
		高齢者援助への活用	1	
		広い心で高齢者と接する	1	
		高齢者の人権の尊重	1	
		高齢者障害者の視点	1	
社会への要望	50	高齢者が利用しやすい設備	24	課題の明確化
		高齢者にやさしい街づくり	14	
		高齢者理解のための教育	8	
		高齢者を取り巻く人々	4	

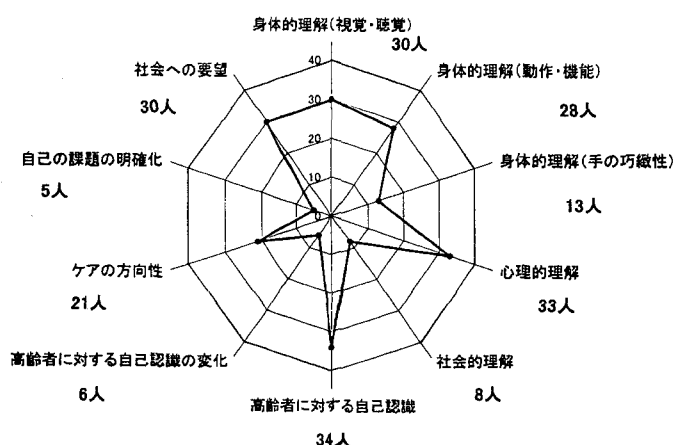


図1 カテゴリー別記載人数 n=45

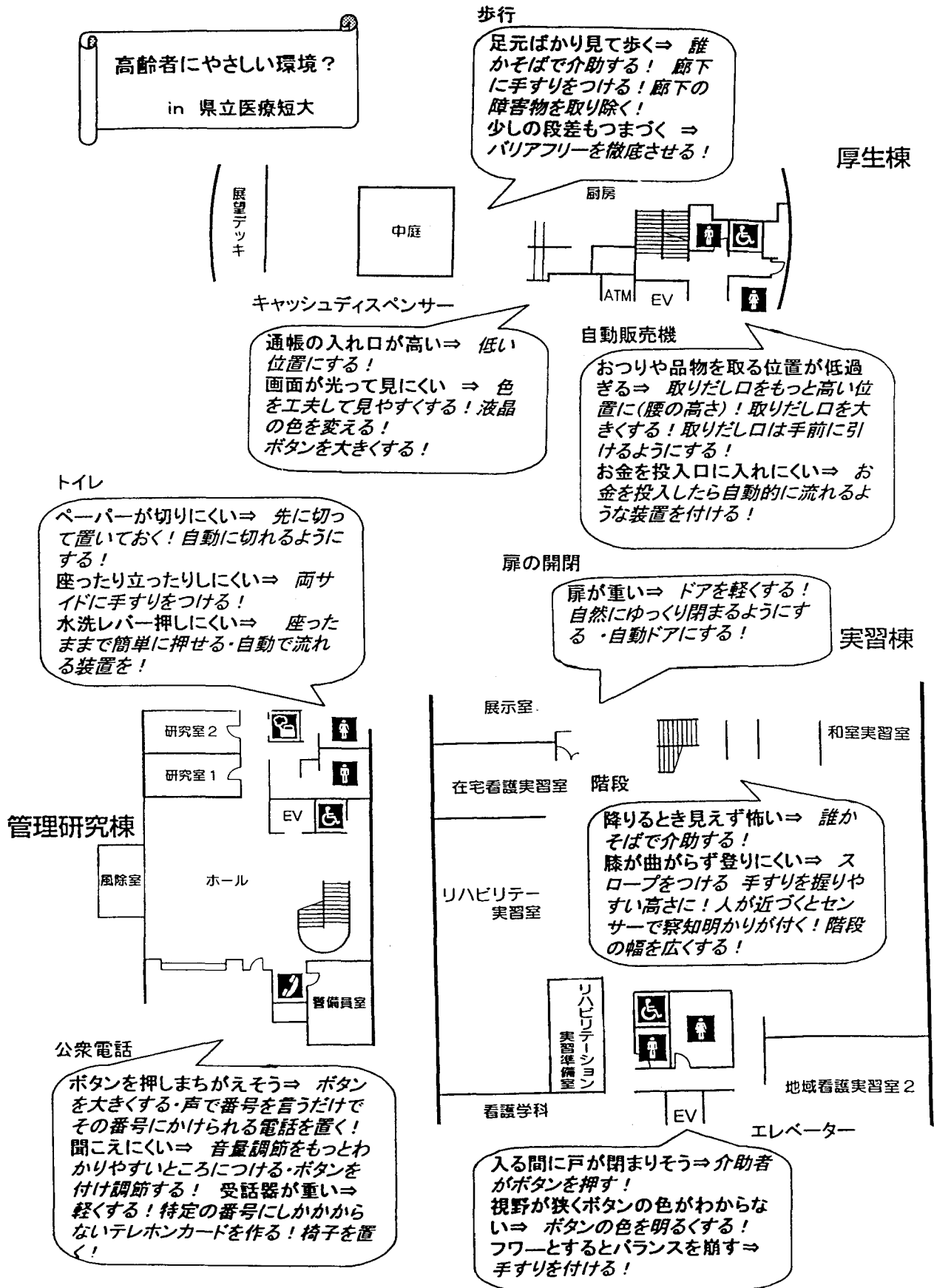


図2 学内バリアフリー探索

「足元を見て歩かないとつまずく」、「体力を使い疲れる」、「自然に動きがゆっくになる」、「お箸が使いにくい」などであった。

次に心理的理解57文脈数(16.0%)では、内容として「不安」、「いらだち」、「恐怖」、「ストレス」などであった。また、社会的理解9件(2.5%)では、「高齢者事故の多発」、「閉じこもり」、「地域社会の住みにくさ」などがあげられた。

3. 高齢者に対する自己認識と変化

高齢者に対する自己認識については、69文脈数(19.2%)であった。その中から3つのサブカテゴリー『相手の立場に立つ大切さ』『理解できていなかった自分への気づき』『やさしい気持ちの必要性』が抽出された。内容としては「高齢者の視点に立って見ることができる」、「障害による苦痛・辛さが実感できた」、「高齢者の日常生活の中での苦勞がわかった」、「今までは不自由な感覚を理解できないでいた」、「頭で納得してただけで全くわかっていなかった」、「体験したことで高齢者に対してやさしい気持ちが持てた」、「介護者・看護者本位の援助が高齢者を苦しめていることがわかった」、「高齢者は命がけで生活していることがわかった」、「しんどくなり動きたくなくなった」、「家に閉じこもりがちになるのがわかった」などであった。

また、高齢者に対する自己認識の変化は、8文脈数(2.2%)であった。内容は「高齢者の身体的イメージの変化」、「援助の必要性への実感」、「共感」などであった。

さらに、自己認識から自己の課題の明確化への広がり、5文脈数(1.4%)で、「高齢者生活改善への実践」「高齢者援助への活用」「広い心で高齢者と接する」「高齢者の人権の尊重」「高齢者・障害者の視点に立つ」などで高齢者の生活全般を捉えていた。

4. 今後の高齢者ケアへの示唆について

高齢者への具体的ケア記載は、37文脈数(10.3%)で3個のカテゴリー『介護用具』『気づかい・心配り』『閉じこもりへの援助』が抽出された。援助内容としては『介護用具』に関してが一番多く「食事介助(ストロー・箸・エプロン)」、「衣生活の介助(靴下履き・ボタンかけ)」、「手の巧緻性(万能ハンドル・自助具)」などであった。

『気づかい・心配り』として、「そばにいて声をかける」、「視野に入る位置で説明する」、「でき

ない部分を援助する」、「事故防止に注意する」、「席を譲る」などであった。

また、『閉じこもりへの援助』では、「1日の計画を立てる」、「一緒に行く」、「高齢者の体力的負担を考え働きかける」など、数多くの具体的ケアの方向性が示されていた。

5. 学内探索に対する意見について

学生が高齢者体験セットを身につけ学内を探索した結果、主に感じたり・困ったりしていた場面は、「歩行では、少しの段差でつまずく」「自動販売機では、お金を入れにくく品物の取る位置も低すぎる」「キャッシュディスプレイでは、画面が光って見にくい」「トイレでは、水洗レバーが押しにくい」「公衆電話では、ボタンを押し間違えそう」「扉の開閉では、重い」「階段では、足元が見えず怖い」「エレベーターでは、入る間に戸が閉まりそう」など、日常生活の中で頻繁に行う重要な行動についてであった。高齢者の立場にたち、数々の不便な点を指摘し、かつ改善策が考えられていた(図2)。

考 察

老年期になると、加齢現象により生理的な諸機能が低下していく。それにより日常生活機能に支障をきたすようになる。高齢者は衰退の一途をたどるだけの特徴ではなく、長く生きて来た経験や人格の円熟によって統合に向かって成熟・発達していく存在である。しかし、学生にとって自分の人生の一直線上にあるとはいえ、老年期ははるか40年先・50年先のことである。半世紀先の将来のイメージは遠く、現実にも身近に老人と接する機会の少なくなっている状況から、高齢者を理解するために知識だけでなく、高齢者に対する興味や関心を高め、洞察力を深められるように体験学習を行った。

1. 高齢者の身体的、心理的、社会的理解への影響

この体験学習から学生は、高齢者の老化に伴う動作や行動の不自由さや視聴覚機能の低下が不安や苛立ち、時には恐怖やストレスをもたらすことを学んでいる。このように、高齢者の体験学習は身体的理解だけでなく、心理的なイメージへの広がりを見せている。佐藤⁴⁾は体験学習では、高齢者の生活を身体的に実感することで、心情的に老いへの理解を進めることができると述べている。体験による心理的イメージの変化は高齢者への気づきから老いへの理解を可能にしている。表面的

な理解で終わらず高齢者の心理的な内面を理解できることに学習効果が波及しているといえる。さらにこれらの身体的、心理的理解が少数ではあるが高齢者事故の多発性や閉じこもり、住みにくさなど社会的な要素へとつながることを理解することができていた。学生がこれまで学習してきた高齢者の身体的、心理的、社会的特徴の知識がこの体験を通して個々の知識を関連づけ学生自身で統合できたと考えられる。しかし、身体的側面、心理的側面の理解の多さに比べ、社会的側面に関しての少ない文脈数は、前澤ら⁵⁾が述べているように、学内という制約された場での体験であったためといえる。今後は学内での体験にとどまらず学外の社会の場での体験学習を加えることにより高齢者の社会的側面の理解がより育てられると考える。

2. 学生の高齢者に対する認識の変化

学生は体験学習での学習で、対象理解だけでなく高齢者に対しての自己の捉え方に注目し、自己の認識として今までとの違いを実感し、それがなぜそのように変化したのか、までを明らかにしている。理解していたと思っていた自分への気づきから、自分がどうあるべきか高齢者に対しての認識の仕方を学んでいる。そして少数であるが、さらにいままで以上に身体的理解が深まり、援助の必要性を実感として受け止め共感的理解にまで広がっているといえる。このように学生が体験学習から、高齢者との心理的距離を狭めていることがうかがえる。平素何気なく行っている行動が予想外にできない自己を発見し、いままでの高齢者への態度を自発的に自己反省したり、援助の方向性を見出している。富田ら⁶⁾が述べているように高齢者に関する知識が、体験により感情を伴った理解へ深まったと考えられる。このように、学習のレベルにおいても対象の理解のレベルから、認識の変容のレベルへ、そして援助の具体化のレベル、課題の明確化のレベルまで学習の深まりがあったといえる。また、一部の学生ではあるが、高齢者に対する自己認識の理解から、高齢者看護に対する自己の課題の明確化にまで学習の広がりがみられた。これは、体験学習を通して多くのことが気づけその気づき体験からまだ経験していない高齢者看護に対してどのように看護を実施していくかという看護への姿勢が明らかになってきていると考える。植村が⁷⁾人の行動を変容させる効果として、知識を(knowing)を得ただけでは人は

行動(doing)をしない。ハッと気づいた(feeling)人は永続的行動変容をきたす。Doingはknowingからではなく、feelingからおこる。また、knowingから必ずしもfeelingが起これとはかぎらないというように、つまり体験学習での気づきが、態度や行動の変容をもたらし力を持っているといえる。

3. 今後の援助活動への影響

学生は今後の援助のあり方として、第一に介護用具の必要性をあげている。これはだれにでもやってくる老いを肯定的に受け止め、どうすれば快適に生活することができるかという視点からの発想と考える。今回、身体の重さや手の不自由さなどを多く体験したことより、衣生活・食生活・手の巧緻性などADLの諸動作に対する自助具に視点が集まったといえる。これまで否定的なイメージであった高齢者の身体的特徴に対して、事実を認識した上で援助者として積極的に関わろうとする姿勢に変化したといえる。さらに、ベアで体験者と介助者を両方経験したことで体験しての身体的・心理的理解と介助しての心理的理解の双方から高齢者を学ぶことの必要性が理解できた。気遣い、心配りなど看護者という立場からだけでなく、席を譲る、いたわる、声をかけるなど日常生活の中でできることを確認している様子が見える。また、わずかではあるが閉じこもりへの援助もあがっており、講義のみでは到達し得ない学びを体験学習を通して獲得していると考えられる。

4. 学内探索から社会への要望

学生は、特に学内探索を通して高齢者を取り巻く社会環境に注目していた。学内探索では、社会生活において一般的にみられる設備を中心に高齢者の視点で多くの意見があった。第一に学生自身も高齢者への理解が不十分であったことへの気づきから、他の人々も高齢者に対する理解が不十分ではないかと考え、体験学習やドライバー教育を行い知識の啓蒙と体験学習をすることで自分たちと同様に高齢者の生活上の不自由さの理解の必要性を述べている。また、高齢者を取り巻く人々の関わり方や高齢者にやさしい街作りや設備を考えることができた。学生は、設備や施設を高齢者にやさしい環境と捉え、外見美ではなく機能美をそして最新の設備を高齢者にとって便利にの視点で多くのアイデアを出していた。看護者の老人観は回復力や生き生きとした生活を実現するか否かを

左右するものである⁸⁾ように、まさにこれらの気づきは、高齢者が生き生きとした生活を送れるようにとの視点に立てていたといえる。学生は毎日の学校生活においてなんの問題もなく過ごしていた学内で、高齢者体験セットを身につけることで、動作や行動が制限され、高齢者の不自由さ、不便さ、危険性を実感した。このことから高齢者の立場にたって今の社会を見つめ直し、やさしい街とは何かを考える動機づけになったといえる。今回は体験を通して感じたことが中心であり、学内という狭い範囲での学びであった。今後、この体験が学生にとって社会全体を見る目を持ち続けられるきっかけとなるよう学習の中で、折りに触れ問いかけていくことが必要と考える。

以上のことから、体験学習における高齢者理解は一応の成果を得たといえる。今後は、対象理解を学習の中で深められるよう、学生の気持ちの変化を大切に、実際の看護場面での援助効果を観察するとともに、体験学習の実施方法を経年的に検討したい。

まとめ

今回、老年臨床看護論の授業の中で高齢者の直面する問題についての理解を深めるため、体験学習を実施した結果、体験学習記録および感想レポート内容より、以下のような学習効果が明らかになった。

1. 実感を伴った身体的理解の育成には体験学習が有効である。
2. 体験学習を通しての身体的理解が、心理的理解にまで影響することがわかった。
3. 体験学習による気づき体験から自発的な自己反

省の心が動き、接し方・態度・具体的ケア等への学習の広がりがみられた。

4. 高齢者の行動特性の根拠を認識することが、高齢者看護の重要性の意識化を可能にしている。

文 献

- 1) 国民衛生の動向 (2000) 47巻9号, 財団法人厚生統計協会, 東京: 37.
- 2) 中川米造 (1991) 医学教育における体験学習, 月刊ナーシング, 11: 57
- 3) 滝川由美子, 吉本知恵, 横川絹恵 (1999) 看護学生の高齢者イメージの変化, 香川県立医療短期大学紀要, 1: 51-60.
- 4) 佐藤弘美 (1993) 老人理解のための体験学習, 看護展望, 18: 32.
- 5) 前澤美代子, 小林たつ子 (1999) 老化のイメージの変化から老人特性の理解に関する教育効果の検討, 第30回日本看護学会論文集-老人看護-, 51-53.
- 6) 富田ゆき恵, 沼本教子, 岡本妙子 (1996) シミュレーションゲームによる「老年期を生きる」体験学習の効果の検討, 聖隷クリストファー看護大学紀要, 4: 29-43.
- 7) 植村研一 (1990) 効果を高める講義の原則 大脳生理学に裏づけされたテクニック, 看護教育, 31, : 454-461.
- 8) 坪倉繁美 (1996) 老年看護の質を高める老人観を養う, “新カリキュラム展開ガイドブック” (看護教育編集室編), 8, 医学書院, 東京: 8-11.

受付日 2001年1月5日